

2023 ・ 令和5年共通テスト漢文解説(本試験) 準拠『早覚え速答法』

※<sup>4</sup>は『早覚え』マニュアルの4ページ、185は『早覚え』の185ページ、40.4は問題文40ページの4行目を示す。

〔出典〕白居易『白氏文集』

〔書き下し文〕※音読のためルビと送りがなの歴史的かなづかいは今のかなづかいに変更。

【予想問題】

問う、古(いにしえ)より以来、君たる者其の賢を求むるを思わざるは無く、人臣たる者其の用を効(いた)すを思わざるは罔(な)し。然(しか)れども両(ふた)つながら相遇(あ)わざるは其の故は何ぞや。今之(これ)を求めんと欲するに其の術は安(いづ)くに在りや。

【模擬答案】

臣聞く、人君たる者其の賢を求むるを思わざるは無く、人臣たる者其の用を効(いた)すを思わざるは無しと。然(しか)り而(しこう)して君は賢を求めんとして得ず、臣は其の用を効(いた)さんとして由(よ)る無き者(は)、豈に貴賤相(あい)懸(へだ)たり、朝野相隔たり、堂は千里よりも遠く、門は九重よりも深きを以てならずや。

臣以為(おも)えらく、賢を求むるに術有り。賢を弁(わきま)えるに方有り。方術者(は)、各(おのおの)其の族類を審(つまび)らかにし、之(これ)をして推薦せしむるのみ。近く諸(これ)を喩(たと)えに取れば、其れ猶(な)お線(いと)と矢のごときなり。線は針に因(よ)りて入り、矢は弦を待ちて発す。線矢有りと雖(いえど)も、苟(いやし)くも針弦無くんば、自ら致すを求むるも、得べからざるなり。夫(そ)れ必ず族類を以てする者(は)、蓋(けだ)し賢愚貫くこと有り、善悪倫(ともがら)有り、若(も)し類を以て求むれば、必ず類を以て至ればなり。此れ亦(ま)た猶(な)お水(みづ)の湿(ぬ)に流れ、火(ひ)の燥(かわ)に就(つ)くがごとく、自然の理なり。

〔現代語訳〕（ ）内は訳者の補足。

【予想問題】

次のことを質問する。昔から、どの君主も賢者を登用しようと思ひ、どの臣下も君主の役に立ちたいと思っている。しかし、両者が実現しない理由は何か。これを実現する理由はどこにあるか。

【模擬答案】

次のように聞いている。どの君主も賢者を登用しようと思ひ、どの臣下も君主の役に立ちたいと思っている。しかし君主は賢者を求めることができず、臣下は自分の力を發揮できないのは、身分の差が激しく、宮廷と民間が遠く離れ、君主が執務する場所が千里よりも遠く、王城の門が九重よりもはるかに重なっているからではないか。

思うに、賢者を求め賢者を見分けるのに方法がある。その方法とは、各人がその同類の性質を明らかにし、その同じ性質によって（賢者なら賢者を、愚者ならば愚者を）推薦させることである。卑近な例でたとえれば、糸と矢のようなものである。糸は針によって布に入り、矢は弦によって放たれる。糸と矢があつても、針と弦がなければ用をなさない。一般に、必ず同類によるというのは、思うに、賢愚善悪にそれぞれ共通点があり、もし同類を求めれば、必ず同じ種類のことから至るからである。これは水が湿地に流れ、火が乾燥した場所に広がるように、自然の真理である。

※訳注

問5③で「ればなり。」が正解となっているので、「からである」と訳したが、本来は「る。」と読み、「ことである」と訳するのが適當である。

筆者の主張をつかむ

## ステップ1——最初の2行を読む

【予想問題】と【模擬答案】では内容がほぼ同じなので【予想問題】の方を2行読むと次のとおり。

問う。古(いにしえ)より以来、君たる者其の賢を求むるを思わざるは無く、賢なる者其の用を効(いた)すを思わざるは罔(な)し。然(しか)れども両(ふた)つながら相(あい)遇(あ)わざるは、其の故は何ぞや。今之(これ)を求めんと欲するに其の術は安(いづ)くに在りや。

## ステップ2——最後の3行を読む

夫(それ)れ必ず族類を以てする者、蓋し賢愚貫くこと有り、善悪倫(とも)がら有り、若(も)し類を以て求むれば、□以類至。此れ亦(また)猶(な)お水の湿に流れ、火の燥に就くがごとく、自然の理なり。

## ステップ3——最後の設問の選択肢を見る

### 三つのステップで共通する言葉を探す

問7で作業するとステップ1と問7のすべての選択肢で次のように「君」「賢」が共通するので選択肢を絞れない。

ステップ1 「君」 「賢」

選択肢①～⑤ 「君」 「賢」

そこで、問6で作業するが、ステップ2の「類」と選択肢③の「似」、**「類」と選択肢④の「同」、およびステップ2の「湿」と選択肢⑤の「潤」は上下ほぼ同じ意味の熟語「類似」「同類」「湿潤」を形成する。**そこで

「熟語による翻訳」で正解つかめ！170

により、「類||同」「湿||潤」と考えることができ、共通する言葉は次のとおり。

ステップ2	[水]	[火]	[湿]	[燥]	[類]
選択肢①	[水]	[火]			
選択肢②	[水]	[火]	[湿]	[燥]	
選択肢③	[火]	[湿]	[燥]	[似]	
選択肢④	[水]	[火]	[湿]	[燥]	[同]
選択肢⑤	[水]	[火]	[潤]	[燥]	

共通する要素が最も多い選択肢④を正解候補とし、主張の一部は

A 君主と賢者について

B 類似 同類

となる。これで十分。これが大事。ここで

退却ルール<sup>3)</sup> 三分以内に主張をつかむ作業をやめて最初にもどる  
を実行し最初から読んでいく。

問1(ア) (対比)

対比に注意<sup>4)</sup>すると波線部の上は、次のような対比になっている。

君は賢を求めんとして得ず

臣は用を効<sup>いた</sup>さんとして由<sup>よ</sup>ず

「得ず」と「由ず」はほぼ同じ意味と考えられるので、「得ず(得られない)」に近い選択肢は「(得る)方法がない」となる①だろう。

問3(ずや)

「豈不<sup>く</sup>」なので読みは反語56の「あに<sup>く</sup>ざらんや」か詠嘆72の「あに<sup>く</sup>ずや」。選択肢では反語の「んや」がなく、④⑤の「ずや」のみ。「豈不A」

ではA全体を「ずや」で受け、さらに「豈不以B」ではB全体を「以(もつて)」で受けるので、正解は「豈く以てならずや」の⑤。

#### 問2〔熟〕

用を効すの「効」を上下ほぼ同じ意味の熟語にすると、「効果」「効能」。  
これとほぼ同じ意味は③「役に立ち」だろう。

「賢を求むる」に相当する③「登用する」も「採用する」と言う意味だから問題なし。

#### 問1(イ)〔漢〕

「以為」は「おもへらく」「くと思う」だから、正解は①の「考える」に。

#### 問1(ウ)〔対比〕

対比に注意し、すると波線部の前後は、次のような対比になっている。

賢を求むるに術有り

賢を弁 　　に方有り

「求むる非弁」と考えると、「賢者をそれ以外の者と区別・弁別して求める」となる⑤が正解。

#### 問4〔熟〕

傍線部の次を訳すと次のようにして正解に至る。

線は針によって(布に)入り、弓は弦によって発射する。もし針と弦がなければ、  
(線や弓だけで)自ら致すを求むるも得べからず。

←上下ほぼ同じ意味の熟語で言い換える  
独自

① 線や弓は、単独では力を発揮できない。

←上下ほぼ同じ意味の熟語で言い換える

#### 問5〔主張〕

主張の一部が「同類」だったことを利用して空欄の前後を整理すると次のとおり。

若(もし)(同)類を以て求むれば、「X」(同)類を以て至。

―― 此(これ)亦(また)猶(な)ほ

水(水と同類の)湿に流れ、火(火と同類の)燥に就(つ)くがごとく

水が同類に流れ、火が同類につき、例外はないのだから、空欄に入るのは「必ず」しかない。

#### 問6

最初の作業で選んだ正解候補は④だった。

**正解は本文言い換え作られる**ので選択肢④と本文の対応関係を照合すると

水の湿に流れ<sup>45.5</sup>

――

水は湿ったところに流れ

火の燥に就(つ)く<sup>45.5</sup>

――

火は乾燥したところへと広がる

なので特に問題はなく、④の正解が確定。

問7〔主張〕

主張の一部は「類似」「同類」だったので、

賢者の同類≠賢者のグループ<sup>④</sup> となる④が正解